

南北朝期の政治拠点だった

大雄寺と

戦国時代の水軍拠点だった

綾井城

高石のまちは、南北朝時代から、政治的・軍事的にも要衝だった。往時の名残を訪ねて、地域の成り立ちに想いを馳せてみよう。

浜寺の由来、そして意味。南朝の重要拠点として

堺市の西区から高石市にかけての大阪湾沿岸には、浜寺公園という広大な大阪府営公園が広がっている。園内は豊かな松林が広がり、かつて白砂青松の海水浴場として人々に愛された。公園の名称にも使われている「浜寺」の地名は、「浜の寺」と呼ばれる大雄寺という寺院が公園の南、南海電鉄高師浜線伽羅橋駅のあたりに存在したことから生まれた。

なぜ浜の寺か？その由来は南北朝の戦乱時代に遡る。後醍醐天皇にゆかりの深い南朝方の拠点・吉野山の日雄寺が「山の寺」「吉野の山寺」と呼ばれていたのに対し、後醍醐天皇の子・後村上天皇が、父が厚く信頼した三光国師（孤峯覚明）に創建させたという。大雄寺はやがて壮大な

伽藍を営み、一大要塞となった。そして浜にある寺ということで「浜の寺」「高師の浜寺」と呼ばれ、やがて「浜寺」の地名が定着したのだ。

ではなぜ浜寺が南朝方の重要な拠点だったのだろうか？ひとつは、ここが吉野を本拠として京の奪還を狙う南朝にとつての最前線だったこと。もうひとつが、海際だったことだ。

「浜が海に面しているのは当たり前だ」と思われるだろうが、浜寺一帯には葦田浦・高磯浦（ちなみに「高石」もかつては「たかし」と読み、高磯・高師と同じ意味を持つ）が構成する「天鳥郷浦」が広がり、小型漁船が頻繁に出入りする優良な「海の玄関」だった。大型の和船登場は遣明船の開始まで待たなければならぬ時代のこと、当時としては小型船こそが海の主役だった。

その玄関口を押さえる浜寺こそ、

さらに南へ一キロほど進んで行くと、城蹟山専稱寺という浄土宗の別格寺院に行き当たる。その山号からも一目瞭然のように、城の跡である。山門前（東面）から北面にかけては水堀跡も保存されている。さらに境内の西部分に土塁の存在も確認されており、往時は綾井城と呼ばれた。南

北朝時代には北朝方の和泉の土豪・田代頭綱がこの綾井城を守って和泉守護（北町方）に「城を（し）っかり警護しておりますので、いつでも兵の招集や出陣が可能です」という意味の報告をしたが、これは綾井城が南朝方の大雄寺（浜寺）に対抗する拠点だったことを意味する。さらに南には北朝方の岸和田古城があり、和田氏が守護代の松浦氏とともに守っていた。松浦氏は九州平戸の松浦氏の一族と考えられ、北朝方は北朝方で九州との連絡を確保する動きを進めていたことが分かる。その後、和田氏の重臣である沼間

明治時代からの主産業だった

貝細工

農家の副業として盛んになっていく

江戸時代、堺で家具づくりや塗物づくりが盛んになった頃、高石市の千代田一帯で、漆工芸の技法である螺鈿に端を発すると考えられる貝細工が興った。高石の貝細工は薄の貝摺りと呼ばれるもので、明治時代後期に始まったと考えられている。当時はおもに農家の副業として貝細工が行われていたが、そこに着目したのは、高石南村の村田正五郎という人物だった。村田氏は明治29年（1896）、佐伯兼松という人物を高石に招いて、小さな工場を始める。それ以後、国内では漆器や装飾品の材料として工芸を中心に、海外の家具向けに輸出もされるなど、幅広く需要が拡大していくこととなった。大正時代には旧高石町の農家のうち150戸ほどが貝殻の加工に携わっており、1900年代初頭には、14～15軒の工房・工場が稼働していた。

300年近く続いたが時代と共に消えた

高石の貝細工に使われる原材料の貝は鮑貝、サザエ、黒蝶貝、白蝶貝、夜光貝、メキシコ貝が多かったようだ。昭和30年代頃に最盛期を迎えたが、徐々に需要が減少し、工場も少しずつなくなっていく。貝細工企業の最後の1社は、現在和泉市で営業している。



光の当たり方で輝きが変わるのも貝細工の美しさの特徴。工芸のほか、アクセサリーなどでも使われている。



芦田川に架けられる紀州街道の石橋。昭和63年（1988）に芦田川の改修工事に伴い、高砂公園に移設にされた。



綾井城主を遠祖とする井上家。国の登録有形文化財に指定されている邸宅の一角には、「綾井の清水」がある。綾織のように美しい水が湧くこの清水から、一帯が「綾井」という名になったと伝わる。

吉野から海上ルートで四国の伊予や九州の太宰府など南朝方の重要拠点と連携するための政治と軍事・経済の生命線。のちに大雄寺は同じ臨済宗の京・南禅寺にも比肩するほどの学問のメッカにもなるが、浜寺がいに栄え、情報と物資の集散地として機能していたかの証明である。

そもそも高石にはこういう古歌が残されていることを紹介しておこう。「おほともの高師の浜の松が根を枕き寝れど家し偲はゆ」

（万葉集）

奈良時代末期に成立した歌集に載る歌だが、「おほとも」は「大伴」であり、高石は大和朝廷の軍事を担当していた大伴氏の領地だったことが窺える。浜寺は当時から軍事の要衝だったのである。

南北朝の制海権争いが生んだ綾井城の沼間水軍

他にも傍証がある。大雄寺跡から

この地に綾井城があったことを示す碑。寺の外周には濠の一部があり、城の面影を残している



綾井城跡（専稱寺）

高石市にかつてあった綾井城の城跡には現在、専稱寺が立つ。お寺の名前が刻まれている珍しい御城印がある。



氏（沼氏）が綾井城に入るのだが、海上においても浜寺と綾井の制海権争いが続いたことだろう。

そして北朝方拠点だった綾井城は、時の流れとともに目的を失った。戦国時代になると沼間氏は上洛した織田信長に従い、沼間清成（任世人道）が「和泉北半国の触頭（リーダー）」として松浦氏と同列になるまで格を向上させた。天正4年（1576）7月、毛利軍が大坂へ向かうと、住吉浜に駐屯していた沼間勢が動員され織田水軍の一角として大坂湾の木津川口で戦い、大敗を喫する。沼間義清（清成の子）・同伊賀・同伝内も討ち死に。だが、清成はその後も織田水軍として活動が続けた。ある意味敵の浜寺が沼間水軍を生み育てたと言えよう。現在浜寺は公園西側の埋め立て地との間の水路が大学ボート部などの練習場となっており、往年の船の行き来のあるさまを偲ばせてくれているのである。